

友だちとのかかわりの中で「音楽教育の基礎」を育む活動 —領域「表現」のねらい・内容を軸として—

Fostering Basic Musical Abilities Through Children's Engagement with Friends

植 田 恵理子

UETA Eriko

1. はじめに

(1) 問題

音楽には、リズム・ハーモニー・音色・ダイナミクスなど様々な諸要素があり、幼児期は、活動の中で、それぞれの諸要素を友だちと一緒に身体全体で感じ、興味を深めながら、感覚的に学んでいくことが望ましい。筆者は、この感覚的な学びが、「音楽教育の基礎」育成につながると捉えている。

幼稚園で行われる、「歌遊び」「リズム遊び」「楽器遊び」などの音楽活動は、教師が、幼稚園教育要領のねらいを基本とし、各幼稚園現場で子どもに身に付けてほしいことを加味して、活動のねらいを定めている。例えば、「友だちとのかかわりの中で、音楽に対する興味・関心の芽を育み、意欲を高めていく」「心地よさ、表現する楽しさを知る」などであるが、これらは、「音楽教育の基礎」育成にも共通する目的である。特に、幼稚園教育要領の領域「表現」3内容の取扱いで取り上げられている、「心を動かす出来事」「感動の共有」「表現しようとする意欲」「表現する過程を大切にする」という4つのキーワードは、芸術の源である、表現することが楽しいという思い、表現したいという姿勢を育むための大切な事柄である（以降、「4つの事項」と記す）。以上により、筆者は、保育現場の領域表現のねらい・内容を軸とした表現活動の中で、音楽教育の基礎を同時に育むことが可能だと考える。そのためには、幼児期の音楽活動に対し、「4つの事項」を活動の中で活かし、音楽表現を楽しむために不可欠な「音に敏感な耳」「音に敏感に反応する身体」の育成、「音楽の諸要素に対しての探究」など、「音楽教育の基礎」を育む内容を活動に構成的に取り入れることが望ましいと考える。

筆者が行う幼稚園教師対象の研修では、研修後の質疑応答時に、表現活動についての質問が多い。質問には、「表現活動の具体的な指導方法に迷う」「どのように子どもの表現を引き出したらよいかわからない」「表現活動を取り入れても、收拾がつかなくなることが多い」「一斉指導に頼ってしまい、個々の表現を引き出す方法がわからない」など、表現活動に対して、苦手意識を訴えるキーワード（苦手、わからない、迷うなど）を含む質問が多く挙げられる。音楽活動についての考え方を問うと、「音楽を楽しむ、音楽活動の中で、幼児らしい様々な表現が楽

しめるように配慮すること」については、多くの教師が頷くなどの反応を示し、同調して声を挙げるなどの姿勢を見せた。しかし、その後、「表現活動の一環として、音楽の諸要素への探究や学び、幼稚園教育要領を踏まえた、感性・表現する力・創造性を豊かにする活動として、音楽活動を捉えているか」という筆者の質問に対しては、「領域『表現』のねらいや音楽の諸要素を意識し、考え、深め合うような活動を行っているとは言い難い」、「歌は歌うだけ、合奏は演奏するだけ、表現遊びは楽しく遊ぶだけで精一杯」、「園児の表現を認めるだけで終わる」などの意見が次々と挙がった。

質疑応答時の、教師の声をまとめると、以下のとおりになる。

- ・「表現活動が、個々の園児の表出段階で終わってしまう」「遊びで終わってしまう」という思いが苦手意識につながり、表現活動を取り入れることに対して躊躇してしまう。
- ・教師には、表現活動に対して、領域「表現」のねらい・内容に沿い、「遊びの中から、何かを感じ取ってほしい」「友だちとのかかわりの中で学びにつながる活動に発展できればよい」という思いがある。
- ・「感性を刺激し、表現を引き出し、表現を教師や子どもたちと共有して深めていく指導方法」について、模索が続いている。

以上により、筆者の園内研修後の質疑応答時から、保育現場の音楽活動は、「音楽活動を通じて、子どもの表出活動から、表現力の育成、音楽の諸要素への探究や学びへつなげたい」という、領域「表現」を軸とした表現力・「音楽教育の基礎」育成に対する教師の思いと、個々の表現を引き出せず、遊びで終わってしまう現実の音楽活動との間に生じる差が問題となっており、表現活動の一環である音楽活動の具体的指導方法が望まれていることが明らかになった。

(2) 「4つの事項」と、「音楽教育の基礎」との関係について

ここでは、「4つの事項」と「音楽教育の基礎」育成との関係について、筆者の考えを記す。

① 「心を動かす出来事」と「音楽教育の基礎」育成との関係

ペスタロッチは、子どもたちが最も良く学習するのは、経験と自己発見を通じてであると確信し¹、フレーベルは、子どもたちが経験、あるいは「自己活動」を通して学習すると考えていた²。

筆者が、上記の知見をもとに保育現場の音楽活動を考えると、子どもが音楽の諸要素に興味を持ち、深め、遊びから学びにつながる活動にするためには、感性を刺激する、印象的な音楽活動・経験が、活動に盛り込まれる必要があると考える。ここでいう「印象的」の意味は、目新しいとか、一過性の特徴的な面白さに突出するという意味ではない。印象的な活動とは、単に歌うだけ、演奏するだけの歌唱・合奏活動とは異なり、友だちとのかかわりの中で楽しさを共有し、ともに感じ、深め合いながら、「もっと試したい」「どうなるかやってみたい」などの探究心を高めていく活動であり、活動を進めるうちに、自己発見を得る活動である。また、印象的な経験とは、聴覚だけにとどまらず、視覚、触覚など、子どもが持ちうる五感を駆使して、全身で音楽を感じ、楽しむ経験である。例えば、「おもちゃのチャチャチャ（作詞：野坂昭如、

作曲:越部信義)」の「チャチャチャ」のところで新聞紙を破り、破る時は歌わないという活動は、子どもから、「どのような音が出るのだろう」と、好奇心を持って注意深く聴く姿勢を引き出す。また、素材を変えて同じ活動を行えば、見て、触って、聴く活動を繰り返すことになる。イメージした音と、実際に出た音を確認する経験や、素材を通して出る音と、歌声のバランスを計るような経験は、幼児に内在する音楽の感性を刺激し、「考え、試し、確認する自己活動」を通して音楽の諸要素を学ぶことにつながる。

印象的な活動や経験は、子どもたちが目的を見つけて活動する姿勢を引き出し、「気づき、調整して考える活動」に発展し、活動の進行にともない、新たな「発見」を得ることにつながる。発見は、幼児にとって「心を動かす出来事」であり、それが要因となって、興味の芽、学びにつながる姿勢がますます引き出されていく。音楽活動でいえば、歌を楽しむ活動が、歌の表現を考えるという目的を持った活動に変わり、その過程の中で、音楽の諸要素に対して、様々な発見を得ることになり、興味が引き出されていくことになる。音楽活動が「心を動かす出来事」に頻繁に遭遇し、音楽に対しての興味の芽が引き出されていくようなものであれば、活動の流れの中で、ペスタロッチとフレーベルが言う、「経験と自己発見、自己活動を通して学ぶ」状態が生まれ、「音楽教育の基礎」が育まれていく。以上により、音楽活動の過程における「心を動かす出来事」は、活動を遊びから学びに変えるきっかけとなり、「音楽教育の基礎」育成に役立つと考える。

② 「表現しようとする意欲」「表現する過程を大切にすること」と、「音楽教育の基礎」育成との関係

無藤（1998）は、「小さい子ども、とくに幼児から小学校低学年では体を動かしての活動が中心になっており、体験はその種の活動での動きと切り離せない。その動きを十分にするなかで、感じ取り、考えることが体験活動になる。活動に没入することが豊かな体験を生み出すのである³⁾」と述べている。

活動を豊かな体験にまで深めるためには、園児が、他者と共感し合う体験を通して何らかの発見をし、その発見を単なる「気づき」に終わらせず、気づきを知見としてその後の活動に生かす過程を繰り返す必要がある。その過程の中で、自分が発見したことが認められ、何かの役に立ち、活かされることが、体験を豊かに広げていく。音楽活動で考えると、教師が歌詞のリズムに合わせた身体表現活動を行ったとする。園児は考え、他者の動きを見て、自らの動きや声の出し方を調整することにより、リズムと身体表現が合致する瞬間を感じ取り、友だちに伝える。伝えられた子どもたちが真似をして納得し、最後は全員で、その瞬間を感じ、喜び合う。このような活動が繰り返されると、子どもたちが、新たな発見を得ようと活動に没頭し、他者の提案を全員で試すことが自然に行われ、体験が豊かに広がっていく。体験が広がっていく過程の中で、感じる・考えることを何度も繰り返すことが、単に歌をうたうだけの活動を、音楽表現を工夫する楽しさを知る活動に発展させ、無藤の言う「豊かな体験」が成り立つと考える。子どもたちが、音楽活動の中で「豊かな体験」をすれば、歌をうたうだけの活動では物足りな

くなり、何かを発見しようと、音楽の諸要素に対して敏感になることが予想される。以上から、気づき・発見を意識した、「表現する過程を大切に」活動内容が、「表現しようとする意欲」を高め、音楽の諸要素に対する理解が深まり、「音楽教育の基礎」育成に役立つと考える。

③「感動の共有」と「音楽教育の基礎」育成との関係

マーセルは、「音楽的成長の原動力は、発達の経験である」と説き、「発達の経験は成し遂げる経験である。それによって心が明るくなり、成功の約束、すなわち、成し遂げることができる希望が、はっきりと感じられる経験である⁴⁾」と述べている。子どもたちが、活動の過程において、協同で達成することを経験すれば、成し遂げることによって「感動の共有」を得ることになる。音楽活動の中では、全員の声が一つになって響く、最適のタイミングで「合う」という経験などが、子どもたちの「成し遂げる」達成感につながり、その心地よさが、さらなる感動を得ようと、タイミングを合わせるための方法を考えるなどの音楽的成長につながっていく。

筆者は、先行研究において、協働の中で育まれた音楽表現は発展し続け、達成感につながり、意欲的な表現を引き出すことを報告し、その要因をまとめた。それによると、自発的な表現は、協働して解決にあたるような目的を設定し、無理のない単純な音楽活動を繰り返すことによって、呼び起こされること、保育の現場では、適度に挑戦欲を刺激する活動が、子どもの主体的な表現を引き出すこと、お互いを認めあい、達成感を感じあうように意識した活動が、子どもが次の音楽表現を、より意欲的にすることを明らかにした⁵⁾。子どもたちが、音楽活動を行う中で、マーセルの言う、発達の経験から「感動の共有」を得ると、それが原動力となって、音楽の諸要素への探究が深められると考える。以上から、「感動の共有」をともなった発達の経験は、子どもの主体的な音楽活動の発展に貢献し、探究する心を引き出し、「音楽教育の基礎」育成に役立つと考える。

以上により、「4つの事項」は、「音楽教育の基礎」育成に対しても、子どもの探究する心を引き出し、遊びから学びへ表現活動を発展させる上でも、重要な役割を担っているといえる。

(3) 研究目的

本研究は、1. の教師の思い、「4つの事項」と保育現場における音楽活動との関係に対する筆者の考えを踏まえ、友だちとのかかわりの中で「音楽教育の基礎」を育む、音楽活動の一方法を提案する。外部音楽指導者としての筆者と、保育現場の教員との連携のもと、幼稚園教育要領に記された「4つの事項」を意識し、表出や、遊びで終わらせない、「感性を深め、感動を共有し、『音楽教育の基礎』育成につなげること」を目的とした音楽活動を、幼稚園で実践する。事例は、A幼稚園において、筆者が教員とともに指導した、「こおろぎ」を題材にした歌活動を取り上げる。音楽の諸要素の中から、ダイナミクス、音色、タイミングなどに着目し、「友だちと一緒に声を注意深く聴きあう」「友だちと一緒に曲のイメージを広げ、曲に合った声の出し方、身体表現を工夫する」ことを中心に展開したこの実践では、歌詞に登場する「こおろぎ」の気持ちを考えながら、音楽の諸要素を、友だちとのかかわりの中で体得していく子どもたちの、意欲的な活動が見られた。子どもたちが、音楽の諸要素に関心を深め、探究的な活動を進

めていく様子を、「4つの事項」との関係性を視点に分析・考察することにより、領域「表現」のねらいや内容を軸とし、「音楽教育の基礎」育成を視座にいれた、音楽活動の在り方を明らかにすることが、本研究の目的である。

2. 研究方法

(1) 実施年・月：2011年9月

(2) 対象クラス：A幼稚園 A組B組（4・5歳児合同クラス）50名（2クラス合同で行う）

(3) ねらい：歌詞の意味を踏まえ、身体表現を楽しみながら、曲のイメージを広げ、それに適した声の出し方を工夫する。

(4) 題材：「こおろぎ」 作詞：関根栄一 作曲：芥川也寸志

「こおろぎ」の歌詞

1番：こおろぎ ちろちろりん こおろぎ ころころりん ちろちろりん ころころりん
くさのなか

2番：にいさん ちろちろりん おとうと ころころりん ちろちろりん ころころりん
うたいます

3番：やさしい ちろちろりん かわいい ころころりん ちろちろりん ころころりん
くさのなか

(5) 指導の流れ

最初に虫クイズを行い、「こおろぎ」の鳴き声を筆者が最初は音程なし、次に音程ありで歌う。次に、「こおろぎ」を子どもたちと斉唱し、「ちろちろりん」という歌詞の部分で、「ダイナミクスと身体表現を工夫して歌う活動」を行う。最後に、子どもたちに、草むらに隠れる「こおろぎ」に扮してもらい、「ダイナミクスと身体表現を工夫して歌う活動」を行う。

(6) 研究方法

筆者による直接指導（12分間の活動）をビデオで録画し、文字化する。活動には、園長、園長代理、担任教師2名、計4名の教員が立ち会う。活動後には、筆者、活動にかかわったすべての教員と振り返りを行い、子どもたちの言動、普段と違った様子、音楽の諸要素についての子どもの気づき・学びの芽が見られた点などについて確認を行う。12分間の活動を、前・中・後半と3つの段階に分けて事例1・2・3とする。ビデオに見られる子どもの様子、文字化した記録、振り返りを参照して、「4つの事項」と、子どもたちの音楽の諸要素（ダイナミクス・音色・タイミングに着目する）に対する興味、探究する姿勢との関係を中心に考察することにより、領域「表現」のねらい・内容を軸とし、「音楽教育の基礎」育成を視座にいれた、音楽活動の在り方を明らかにする。

(7) 倫理的配慮

対象園には、事前に研究概要を園長、園長代理、担任教師に口頭で説明し、具体的実践については、全担当者とのミーティング、担任教師との間で、複数回におけるメール伝達において、十分な情報提供を行い、研究目的以外に使用しないという条件のもと、VTR撮影・データ文字化の許可を得て、研究を開始した。また、対象園には、幼稚園便りに、実践の告知、実践が研究対象であること、VTR撮影を行う旨、保護者に伝え、撮影に対して不都合がある人は、期日までに申し出ることを記載してもらった。期日まで待ち、不都合の対象者がいないことを園と確認の上、研究を開始した。

3. 結果と考察

ここでは、12分間の活動を時系列順に3つの部分（事例1から3）に分け、それぞれの場面の、子どもの様子を記した上、考察する。

(1) 事例1の子ども様子と考察（始まりから4分45秒まで）—虫クイズ・音を聴き合う場面—

①子どもの様子

筆者が虫の歌にはどのようなものがあるか聞くと、「ちょうちょの歌」「ありの歌」など、子どもたちから様々な虫の歌が挙がってきた。次に、筆者が「虫クイズをします」と言って、「みーんみーん」と身体表現を交えて言うと、子どもたちから「せみ」と元気よく答えが返ってきた。筆者が急に声をひそめて「りーんりーん」とかすかな声で鳴いたところ、子どもたちが一瞬静かになり、しばらく間（間1）を置いた後、A子が「すずむし」と答えると、ほぼ全員の子どもたちが、A子の方を振り返り、口々に「すずむし」と言い始めた。筆者が、「すずむしが逃げるので、小さな声で言って」と言うと、子どもたちは、声をひそめて「すずむし」と言い、しばらく間（間2）があった後、一斉に笑い出した。

筆者が虫クイズを続け、更に声をひそめて、「ちろちろりん」と鳴くと、子どもたちから「こおろぎ」という声が返ってきた。筆者が、ここではじめて音程をつけて「ちろちろりん」と歌うと、子どもたちの間で、また間（間3）があった。子どもたちにも歌うように声がけすると、子どもたちは、小さく、やさしい声で「ちろちろりん」「ころころりん」と歌った。最後に、筆者が、伴奏を弾きながら、歌詞の内容（かわいい「こおろぎ」は、かわいく歌おうね）に対して語りながら歌うと、子どもたちは、弱く、やさしい声で歌った。中には、裏声を使った高い声を出す子どももいた。筆者が無伴奏にすると、子どもたちは、ピアノ伴奏があった時よりも、更に声をひそめて歌っていた。

②考察

この場面は、歌活動に入る前の導入部分で、筆者は、最初、普通に会話をするときの声の音量で子どもたちに語りかけ、子どもたちも、自分の知っている「虫に関する歌」や「虫クイズ

の答え」を筆者に伝えようと、口々に声を挙げていた。全体的に騒がしく、他者の答えを聞かず、自分の答えを筆者に伝えようと何度も声を挙げている子ども、集中できず、足を投げ出している子どもの姿が見られた。

間1は、表出から表現に、活動が変化するきっかけになったと筆者は考える。子どもたちが、一瞬で静かになったのは、感じ方の差はあっても、今までの会話で聞いていた声との違い、変化を感じ取ったことが要因だと考える。また、「リーンリーン」と鳴く虫の名前がわからず、「なんだろう」と一瞬とまどったことも、要因の一つだと考える。A子が「すずむし」と応えた時、ほぼ全員の子どもがA子の方を振り返り、再び筆者の方を向いて、口々に「すずむし」と言う姿勢から、この場面では、変化を感じる→疑問を感じる→他者の意見に納得する→納得した答えを発表するという、個々の思いを口々に表出する活動から、友だちとのかかわりの中で、他者の意見を参照し、納得して表現することへの変化が読み取れる。また、「間」の静寂が緊張を伴い、子どもたちの感性を刺激して集中力を上げ、筆者の鳴き声に対し、興味を持って聴くという、探究の姿勢を引き出している。

「小さな声で虫クイズの答えを言ってほしい」という筆者の要望に応え、子どもたちが音量を下げてゆっくりと言った結果、偶然、「すーずーむーし」という発声のタイミングが合い、全員で、「妙に間延びした言い方」をする結果となった。子どもたちが一斉に笑い出したのは、その言い方が面白いなど、興味を引かれたからであり、間2は、面白いなどと思う気持ちを、全員が共有する前の、「音を集中して感じるための時間」として役立っている。この場面では、「声をひそめることによって生じる緊張感」「言葉を言う速さを変えることによって起こる変化」を全員で感じ、感じたことに共感することが、言葉とテンポの関係についての興味を引き出していると考えられる。

間3は、音色に対する、探究の姿勢を引き出すきっかけになった。音程なしで「ちろちろりん」と言ってから、歌声で「ちろちろりん」と歌う際に起こる変化（音色の変化）を感じ取ったことが、子どもたちに「間」が生じた一因だと考える。間2と3の「声をひそめること、テンポ・音色を変えること」によって起こる変化を感じた経験が、子どもたちにとって印象的であり、ダイナミクス、音色への興味を引き出していることが、次の活動である、歌詞の内容「やさしい・かわいい」に即した声を出そうと、身体を丸めて歌う、裏声のような高い声を試みる、無伴奏で歌う時に、更にボリュームを下げようとする子どもの探究的な姿から読み取れる。

事例1では、「間」が「心を動かす出来事」として機能することにより、聴き合う活動が発展し、一緒に笑い合うことによって、「感動の共有」が行われている。また、体験的に聴いている虫の声を、音楽的に表現する経験を得たことにより、ダイナミクス・テンポ・音色など「音楽の諸要素」に対する興味が深まり、裏声を試みるなどの「表現しようとする意欲」が高まっている。また、言葉で表現する→歌声で表現する→音色・ダイナミクスの変化を試みるという、短い活動時間の中でも、子どもたちが、無理なく段階的に表現を行う、「表現する過程を大切にすることが自然に行われている。以上により、この場面では、遊びの中で共感し、友だちとの

かわりの中で探究しながら、音楽の諸要素への興味を深める、4つの事柄を軸にした、「音楽教育の基礎」育成が無理なく行われているといえる。

(2) 事例2の子どもの様子と考察（4分45秒から6分00秒まで）—歌の歌詞に合わせて、ジャンプする場面—

①子どもの様子

筆者が「元気のよい、ジャンピングこおろぎがやってきました、ジャンプできるかな」と問うと、それまで座っていた子どもたちが、元気に「できるよ」と応え、次々に立ち上がった。筆者がキーボードの伴奏をリズムカルなものに変え、歌詞の「ちろちろりん・ころころりん」の部分でジャンプしようと誘うと、子どもたちは興奮し、嬌声を発しながら、音楽に合わせて身体を揺らした。「こおろぎ」の曲は、3番までに12回ジャンプする箇所があり、ジャンプを経るごとに、みんなで笑い合う時間が長くなってきたので、筆者は、伴奏を中断して子どもたちの様子を見守り、曲の流れが損なわれない程度に間を取ってから、伴奏を再開することを繰り返した。この場面の最後の方では、友だちと一緒に、曲の拍子に合わせて、手を前後に振る動きを行う子どもが増えだした。また、ジャンプする箇所が近づくと、「ちろちろー」と、かけ声のように歌いながら身体を低くし、友だちと一緒にタイミングを取ってジャンプする子どもも多くなり、最後は、ほぼ全員が「ちろちろー」と、だんだんゆっくりと言いながら声量を上げ、跳ぶことに備えて身体を縮める身体表現を行い、タイミングをそろえてジャンプすることを試みていた。

②考察

園生活の中で、歌の活動時に、手振り、身振り、大きな身体表現などを取り入れながら歌うことはよく見られるが、活動が発展しなければ、個々が自由な身体表現を行いながら、歌って楽しむだけにとどまり、「表出し、満足感を得るだけの活動」で終わってしまう可能性がある。この場面でも、最初、子どもたちは、筆者のリズムカルな伴奏に煽られ、興奮して嬌声を挙げながら、歌って楽しむ表出の活動を行っており、キーボードの伴奏も、子どもたちの嬌声でかき消されている状態だった。しかし、最初のジャンプを行ったときに、子どもたちの着地のタイミングが合い、その後、小さな笑いが漏れた。この笑いの場面から、子どもたちの態度に変化が見られ、ジャンプの箇所に来るまでの曲の途中に嬌声が挙がらなくなり、伴奏に集中してしっかりと歌い、ジャンプが終了した時だけ、嬌声を挙げて笑い合うようになっていった。

筆者は、この場面で、偶然、着地するタイミングが合ったことに対し、子どもたちが何かを感じ、暗黙のうちに、目的の共有が行われたのではないかと推察する。また、ジャンプを重ねるごとに、友だちの方を向いて笑い合う子どもが増えたことから、子どもたちが、目的の達成感を感じ、喜び合っていると考える。また、その後の活動で、ジャンプするタイミングをそろえるために、歌声を掛け声のように使い、クレシェンド・リタルダンド⁶的な効果をつけていることから、子どもたちが、「全員でタイミングを合わせてジャンプする」という目的を共有し、「音楽に合致した身体表現を、協同して行うための工夫」について、探究する姿勢と学びが育ま

れていると考える。

岡林ら（2014）は、「無自覚な学びではあるが、音楽活動の中で、子どもたちが動作を同期するために声を合わす、動作の始まるタイミングを計るなど、人との関わりの中でリズムカルな動作のまとめ方や、呼吸や声を合わせる方法を学んでいる」という。この場面では、音楽と身体表現の合致という発見が、「心を動かす出来事」になり、何度も顔を見合わせて笑い合うことで「感動の共有」を行い、動作の同期やタイミングを計る、岡林らのいう「無自覚な学び」が、タイミングを合わせて「表現しようとする意欲」を高め、クレシェンド・リタルダンド効果という、音楽の諸要素を自然に体得することにつながっている。また、何度もジャンプのタイミングを計ったり、タイミングを計るために注意深く伴奏を聴いたり、クレシェンド的な効果を繰り返し体験しながら、友だちと喜び合うことを繰り返す、「表現する過程を大切にすること」が、更に「無自覚な学び」を深め、友だちとのかかわりの中で「音楽教育の基礎」を育成することにつながっている。この場面では、目的を共有し、友だちとのかかわりの中で探究活動を行いながら、音楽の諸要素を体得していく子どもたちの姿が見られ、4つの事柄を軸にした、「音楽教育の基礎」育成が無理なく行われているといえる。

(3) 事例3の子どもの様子と考察（6分00秒から活動の終わりまで）―草むらに隠れる表現活動の場面―

①子どもの様子

筆者が「人間には見つかりたくない、臆病なおおろぎが来た」と言い、子どもたちに隠れることを勧めると、子どもたちは全員伏せて身体を小さく丸め、「臆病なおおろぎ」になりきった。筆者が怪しげな感じの効果音をキーボードで弾き、園長や担任教師に、「おおろぎ」を見つけに行くようお願いすると、子どもたちは、声をひそめて友だちと身を寄せ合い、静寂を守った。ここから、筆者は伴奏を弾くことを止めて、子どもたちに「おおろぎ～」と歌いかけると、子どもたちからは、掠れた声で、「ちろちろりん」という歌声が返ってきた。筆者と教師たちは、草むらのつもりで子どもたちに大きな布をかけた。布は全部で8枚あり、子どもたちは布に覆われて、姿が完全に見えない状態であった。布を通して聞こえた子どもたちの声は、子どものそばまで行かなければ聞こえないほどの小さな声であり、筆者と教師たちは、子どもたちの中に入り、しゃがみ込まなければ、声が聞こえない状況であった。教師が近づくと、布の下から、あちこちで忍び笑いが漏れたが、すぐに聞こえなくなった。筆者が、「どこに行ったのかな、呼んでみようかな」と、何度も「おおろぎ～」と歌いかけると、子どもたちは、掠れ声に歌声が混ざったような声で「ちろちろりん」と応え、その後、声がどんどん小さくなり、最後は呼びかけても応えず、しばらく静寂があった。

②考察

この場面では、子どもたちが、「先生に見つからない」という目的を共有し、かすかな声、掠れ声で声音を工夫しながら、協同して音量を下げていく姿が何度も見られた。この場面の冒頭で、筆者が「隠れて」と言ったとたん、一人の子どもが、床にうつ伏せに寝ころび、身体を丸

めた。それを見た他の子どもたちは、次々と真似をしていった。これは、「他の幼児の表現に触れ、納得し、目的達成のために必要な表現を行う」「場の状況に応じた表現を、他者とともに協同して行う」という、友だちとのかかわりの中で推し進める表現活動といえることができる。また、全員で、布の下からかすかな声を出し、教師に見つからないように協力して声量を下げ、ダイナミクスを工夫する姿、忍び笑いを布の下で注意し合う姿、静寂を保つ姿から、協同して行う表現活動が展開されているといえる。

この場面での活動は、歌うことで音楽の楽しさを感じるだけの活動とは異なり、「教師に届く、ぎりぎりの声量」を他者の声とのバランスを考えて出す、状況に応じた鳴き方を考え、最後は呼びかけに応えない選択をするなど、「感じ、考え、協同して行う表現活動」といえることができる。活動の中で得た緊張感は、子どもたちにとって楽しく、いたずら心を刺激する「心を動かす出来事」であり、緊張感の中で声を聴き合うことにより、集中して聴く、緊張を楽しむという「感動の共有」が引き出されている。また、ダイナミクスを駆使して声を調整する、目的に即して表現方法（掠れた歌声や、半分無声音という歌い方）を変化させる、友だちとのかかわりの中で発見（場に応じた声の出し方を知る）を繰り返し、発見したことを自分の表現方法に取り入れるなど、「表現する意欲」が引き出されており、発見・省察・表現を繰り返す、「表現する過程を大切にする」ための段階が無理なく踏まれている。また、活動の過程で、ダイナミクス・音色の変化に対する興味・関心が深まっていることが、布をかけられてから、更に声量を下げを試みたり、友だちの掠れ声を真似したりする姿勢から読み取れる。

以上により、この場面では、目的を一つにし、他者の表現に触れ、場に応じた表現活動の探究を行いながら、音楽の諸要素を体得していく子どもたちの姿が見られ、4つの事柄を軸にした、「音楽教育の基礎」育成が行われているといえる。

4. まとめ

3つの事例では、活動の中で、「心を動かす出来事」が重要な役割を果たしている。「心を動かす出来事」を経て、表出が表現に変わったり、出来事で得る、感じ合う経験、発見などによって、探究する姿勢が深まったりしている。探究する姿勢の深まりには、「感動の共有」が大きく関与している。感動の共有が、探究する気持ちに拍車をかけ、子どもたちの協力する心、「表現意欲の高まり」を引き出している。また、子どもたちが感じ合うところから、何かを発見し、表現を豊かに広げていく「表現する過程を大切にすること」が、活動を単なる遊びから学びに段階的に変化させ、「遊ぶだけの活動から、感覚的に学んだことを深める」姿勢を育てていく。

以上により、保育現場での、音を媒介にした活動は、「4つの事項」が関連し、互いに相乗効果を生み出しながらかつなげていくように構成を考えるべきである。「こおろぎ」の活動のように、子どもたちが、集中して聴くことからはじめ、「心を動かす出来事」をきっかけに、音への探究活動を展開していくような活動は、領域「表現」のねらい・内容を軸とし、友だちとのか

かわりの中で「音楽教育の基礎」を育むために必要な音楽活動として提案できる。

<注>

- 1 ドロシー・T・マクドナルド&ジェーン・M・サイモンズ (1999) 「音楽的成長と発達―誕生から6歳まで―」 溪水社 8頁
- 2 前掲3 9頁
- 3 無藤隆 (1998) 「自ら学ぶ子を育てる」 金子書房 22-23
- 4 ジェームズ・L・マーセル (1971) 「音楽的成長のための教育」 音楽之友社 133頁
- 5 植田恵理子 (2013) 「協同的な学び」を引き出すための音楽活動2-参加体験型音楽劇「音の絵本 西遊記」から得られるもの-『花園大学社会福祉学部研究紀要』第21号 104頁
- 6 「教育用音楽用語 文部科学省編」(2004) 教育芸術社によると、クレシェンドはだんだん強く、リタルダンドはだんだん遅くという意味の音楽用語である。
- 7 岡林典子・砂崎美由紀・山崎菜央・深澤素子・難波正明 (2014) 「幼少をつなぐ音楽活動の可能性：京都幼稚園と京都女子大学附属小学校1年生の実践をふまえて」『京都女子大学発達教育学部紀要』第10号 81頁

<参考文献>

- ・伊藤仁美 (2012) 「保育者に必要とされる音楽表現力の育成に関する一考察 (3)」『こども教育宝仙大学紀要』第3巻 21-31
- ・加藤繁美 (2010) 「新版 子どもと歩けばおもしろい:対話と共感の幼児教育論」ひとなる書房
- ・白梅学園大学子ども学研究所「子ども学」編集委員会 (2014) 「子ども学」第2号 萌文書林
- ・角谷詩織・泉真理 (2013) 「小学1年生1学期の発達・適応を促進する幼児教育-上越教育大学附属幼稚園出身児童の特性に基づいて-」『上越教育大学研究紀要』第32巻 127-136
- ・角谷詩織・無藤隆・泉真理 (2014) 「幼児教育における子どもの学びの姿-幼少接続と幼保一体化の流れの中で-」『上越教育大学研究紀要』第33巻 53-62
- ・無藤隆 (2009) 「幼児教育の原則 保育内容を徹底的に考える」ミネルヴァ書房
- ・無藤隆 (2011) 「保育の学校」第2巻5領域編 フレーベル館
- ・矢部朋子 (2011) 「幼児の遊びにみられる音楽的表現の共有過程」『保育学研究』第49巻 第2号 52-60